

その可能性を最大限に

笛吹市立石和中学校1年 鹿野 穂高

朝六時半。ぼくは、大阪万博にいた。八月の暑い日、家族でそろってみられる日はこの日だけと、山梨から車で向かった。

二〇二五年四月十三日から十月十三日まで大阪市的人工島・夢洲で開催されている大阪・関西万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマにした国際博覧会だ。世界から約一五〇の国や地域が参加し、最先端技術や多様な文化を通じて未来社会のあり方を提案する場となっている。ぼくは、日本館で火星からの石に触れた。なぜ火星からの石だとわかったのか聞いて興味深かった。大阪パビリオンでは心筋シートの動くところを見てきた。心臓病で苦しむことがなくなる未来がもうすぐだと感じた。世界中の問題に対してもいろいろな研究が進んでいるということを感じた。一日中、ぼくは夢の中にいるようだった。様々な国をいっきに旅行できたような感覚になった。未来の農業や都市を感じることができた。

万博には賛否両論ある。ひとつには、会場建設費や運営費の一部を賄うため、国と大阪府・市から約三〇〇〇億円もの税金が投入されている、ということに批判が集まった。「万博よりも住民生活に直結する施策に税金を使うべき」という意見があった。金額が大きすぎて、ぼくは判断しづらいけれど、見る価値のあるものが多かったと思う。予約が取れないから並ぶこともできないのが残念だったので、いい評価があるものは残し方を考えてほしいなと思っている。

次の日は、兵庫県神戸市にある「人と防災未来センター」に行った。阪神・淡路大震災から得た貴重な教訓を世界共有の財産として後世に継承し、国内外の地震災害による被害軽減に貢献すること、および生命の尊さ共生の大切さを世界に発信することを目的に設立された。映像で震災と復興を追体験して、被災された方々の話の記録が映像と共にたくさんあって、その場で話を聞いているようだった。学校の日誌の内容を読むと普通の暮らしができないときの工夫や復興までの道のり、各地域での取り組みなど様々なことが学べた。そして、最新の防災知識を身につけるために職員の人に教えてもらったり、考えたりして災害を学び、防災・減災について考えることができた。

日本には、およそ五〇種類の税金があり、「どこに納めるか」、「何に税金をかけるのか」、「誰が税金を負担するのか」、「税金の使いみちは決まっているのか」により「税金」を分けることができる。二つの施設を訪れて、税金の使いみちについて考えることにもつながった。大切なことを考え、体験させてくれる施設も今後の未来のためにも大切だと改めて感じた。一人一人が望む生き方を考えて、その可能性を最大限に發揮できる社会を作っていくことが必要だと思う。そのために使われている税金に感謝し何にどう使われているか関心を持ち続けたい。